
虚口忌憚

山田ゆうし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚口忌憚

【コード】

N4940Q

【作者名】

山田ゆーし

【あらすじ】

関東近郊の発展都市T市で起こる連続猟奇殺人事件。殺された遺体には、すべてある共通の特徴があった……。

#1 プロローグ

#0 プロローグ

雨が降っている。

強くはないが肌に染み入ってくるような雨だ。

その雨の中、わたしは自分の家の帰り道を走っていた。

「大変。今日、『ラブえき』の日だった」

『ラブえき』とは最近人気のドラマのことだ。内容は主人公が行く先々の駅で女の人と出会い、恋に落ちるといふ少しコミカルタッチの強いもの。これで元はノンフィクションといふのだから驚かされる。

わたしはこのドラマの主演俳優が好きで毎週欠かさず見ている。いや、見ていた。それだというのに今日は余計な用で遅れてしまった。

「まったく。庸子の奴」

今日はやけにしつこかった。今度痛い目にあわせてやらなければ。なんならあのことをバラしてしまってもいい。はたしてあの娘はどんな顔をするだろう。

そう光景を思い浮かべ笑うと、三つ先の街灯の下にポツンと立つ人影が見えた。

こんな雨の中何やってるんだろう。そう思いわたしは目を凝らす。その人影は全身を覆うような真っ黒なコートを着ていた。フードを下ろして顔は見えないが、小柄なことから女の人かな、と思った。

そんなことを考えながら徐々に街頭へと近づくと、ふとその影が顔を上げた。

「ひっ」

それを見て、思わずわたしは足を止めた。

フードの下の瞳が爛々と紅く光っていた。

具体的に何が怖いというわけではない。なんてことはない。ただ眼の色が少し違うだけじゃないか。

しかし動けない。声も出せない。

その瞳の得体の知れない何かに、ただただ怯えるしかできない。

「……いん……じゅう……まこ……」

フードの中から声がした。

「誠亮高校2年B組出席番号14番、榊原由真子」

体が強張る。なぜならそれは、

「……わたし……?」

そう。わたしだ。

榊原由真子。確かにわたしの名前だ。それならひょっとして、この人はわたしを待っていた……?

フードの女はまるでわたしの心の声が聞こえたように小さく頷き、

「榊原由真子。7月9日生まれ」

パシヤと音を立ててこちらに歩きます。

「小さい頃からおしゃべりが好きで仲良しグループのリーダーになることが多かった」

パシヤ。パシヤ。

「成績も優秀で性格も良いことから学校関係者からの評価も上々」

パシヤ。パシヤ。パシヤ。

「容姿も整っており、登校中に告白されたことも多数。しかし現在交際している相手はいない」

パシヤパシヤパシヤパシヤパシヤパシヤパシヤ。

動けない。心は今すぐここから逃げ出したいのに体がいうことをきかない。故に彼女が近づいてくるこの状況から目をそらすこともできない。

そうして固まったわたしの1メートル手前ほどで女が止まった。

「嘘つき」

「！」

フードの中の口が三日月型に裂ける。そして唐突に口調を変えた。

「『由真子。相談、のつてくれる？』」

え？ これ…どこかで…。

「『もちろん。わたし達親友でしょ』」

これは…わたし？

「『最近、彼の様子がなんか変で…』」

これは、庸子？

「『わかった。わたしがそれとなく聞いといてあげるから』」あり

がとう、由真子『」

間違いない。これはわたしと庸子の会話だ。

いったいどうして…？

疑問を抱いた瞬間、女の口調がまた変わる。先ほどとは違う、妖

艶なものへと。

「『ねえ…。いいでしょ？』」

「！」

「『な、お前…』」

これは…。

「『ね。わたしにシなつて。前から気になつてたんでしょ』」そ、

それは…『ほら…いいよ』」

これは……！

「な、んで……」

「……………」

フードが笑みを濃くする。

「嘘つき」

人影がフードを脱ぐ。そこでようやくフードの中の顔があらわになつた。

美しい少女だった。まるで絵の中から抜け出してきた妖精のような綺麗な顔立ち。しかしそれが逆にその瞳のおぞましさを引き立たせた。

「現在時刻、午後7時4分」

ああ、もうドラマ始まつちやつたな、と頭のどこか能天気な部分がある。しかし体はぴくりとも動かない。

「貴方がこんな時間まで家に帰らなかった理由。それは知り合いの三間坂庸子と話をしていたため。内容はこう。『最近、妙に自分の彼氏と会ってないか』」

「！」

鼓動が早鐘を打つ。

「貴方はこう答えた。『自分は相談に乗っていただけだ』と。そして庸子に言う。『そもそも彼の様子がおかしいのはお前のせいじゃないのか』『お前は彼女としてちゃんとやれてるのか』と」

なんなんだ。

「それでも彼女は納得しなかったが、貴方はお気に入りのドラマの時間だからと無理やりに彼女の追求を逃れた」

なんなんだ、こいつは。なんでそのことを知っている？

庸子と話している現場を見ていた？ 否。それだけじゃ説明つかない。

何故誰も知らないホントのことも知っている？

「嘘つき」

少女が綺麗な顔を歪めて嗤う。

「貴方は彼女の何をなんとも思っていない。もちろん友達だなんていうのは以ての外。路傍の石ころくらいにしか思っていない」

「ちが…！」

「違うはない。なぜなら貴方は彼女の交際相手を当然のように寝取った。そしてそれをなんとも思っていない。だからその男とも何度も寝て、そのことで自分でなく彼女を責める」

「違う…。庸子とは親友で…」

「この場でも嘘をつく、か。じゃあ言おうか。真実を」

少女の瞳がまるでわたしの身体を射抜くかのように細められる。わたしはそれに気圧され尻餅をついた。

わたしの顔を少女が覗きこむ。

「そもそも貴方は『友達』というものを作ったことはない。少なくとも貴方が『友達』と思う者は今まで只の一人としていなかった。周りは自分を引き立たせるだけの只の『端役』。もしくは自分を楽しませるためだけの『道化』。それらをまとめて『友達』としていた。貴方は自己を何より尊いものだと考え、人を使うのが上手かった。だからどんな時も自分が中心にいて、自分の意に反した者ははじいて、抹消した。人を動かす際によく使ったのが『嘘』だ。貴方は悪意を隠した嘘を平気で使った。三間坂庸子も貴方の嘘に翻弄された『道化』の一人。さぞや楽しかったろう。自分が浮気相手とも知らずに自分を頼ってくる彼女の姿は。さぞ滑稽だったろう。全て自分が仕組んだものとは知らずに泣きついてくる彼女の姿は」

一気にまくしたてられてもなにも言えない。なにも言うことができない。だって全部ホントのことだから。

「貴方のようなものを『嘘憑き』という。嘘を『吐く』のではなく、嘘に『憑かれる』者。もはや息をするのと同じように嘘を吐く生き物。嘘なしには生きられないもの。しかし憶えておくといい。悪意のある嘘は他人だけではなく自分さえ傷つける」

少女がゆっくりとこちらに手を伸ばす。

「それは精神的に、あるいは肉体的に。間接的に、あるいは直接的に。他人と同じ分を自分自身に」

わたしは体を動かそうとするけど震えてうまく動かすことができない。せめて助けを呼ぼうと口を開くが、あ、という言葉以外何も出てこない。

「私は嘘を喰らうモノ」

少女の冷たい手がわたしの頬に触れた。

「あなたの嘘、いただきます」

少女が、嗤った。

* * *

「ゲンさん！」

「どうした」

「被害者の身元、割れました。榊原由真子。K市にある誠亮高校つてとこの2年だそうです」

「…死因は？」

「刺殺だそうです。鋭利な刃物で心臓を一突き。腹部にも同様の傷がいくつかありますね。あと、直接死因には関係ないんですが……」

「なんだ？」

「身体の一部が、切り取られていたそうです」

「…一部？」

「ええ。………舌が」

くプロローグ 完く

#1 プロローグ（後書き）

ども。初めまして。山田悠史と申します。つたない文ではありませんが、どうかよろしくお願いします。

#2 宝栄の三鬼

#1 宝栄の三鬼

T市。

最近になつて開発の進んできた新興開発区。その煽りを受けたものは少なくない。特に東区は再開発予定となつたまま廃棄された建物が数多く存在した。

その内のひとつ。廃墟同然の建物の中に、おおよそ20人くらいの少年たちがたむろしていた。

彼らは手にパイプや角材を持ち、目の前の獲物達を取り囲んでいる。獲物は三人。いずれも女学生。

先頭にいるのはしかめっ面をした少女。肩に棒状のケースをかけている。そのやや後ろには無表情をした少女とニコニコと笑つた少女が並んでいる。

彼女らは男たちに囲まれたこの状況を平静に受け止めていた。

* * *

嫌な匂いがする。

この廃墟がそうなる前からあつた匂いか、それとも廃墟になつた後に生まれた匂いか、はたまた周りを取り囲む男たちからの下卑た匂いか。

まあどれにしても不快なものには間違いない。あたし 三条真はそんなことを思いながら溜息を吐いた。

おそらくそれが気に入らなかつたのだろう。男たちの中からガタイのいい奴がひとり、こちらに近づいてきた。その顔にはいやらしい笑みを浮かべている。

「おいおいお姉さん達。どうしたの？ もしかして道に迷っちゃっ

た？」

男たちの中から失笑が漏れる。この辺には人の住めるようなまともな建物はほとんどない。誰でも知ってることだ。

あたしは再び溜息を吐いてさつき言ったセリフを繰り返した。

「だからさつきも言ったろうが。お前らが盗ったウチの後輩のバッグ出せつつの」

ガタイのいい男はニヤニヤしながら周りの男たちを見まわす。

「おいおいおい。いきなり泥棒呼びわりだよ。まいるな〜」

周りの男たちがそろって「マジかよ」「キチー」と下卑た笑いをあげる。

……いちいち癪に障る野郎どもだ。

あたしは男の文字通り目の前に指を突き出す。男は指に突かれたように一歩下がるが、別に目つぶしてわけじゃない。出した指は三つ。それが意味することは、

「お前らが盗んだという根拠は三つ」

三本立てた指を一度しまい、新たに指を一本だけ立てる。

「まずひとつは中央区の東側付近でひったくりをする集団は限られている。っていうかお前らしいくない」

T市には大まかに分けて5つの区域がある。ひとつは再開発予定のままほつとかれているこの東区。裕福な人々が暮らす高級住宅が立ち並ぶ西区。一般住宅地である南区。公共機関が多く存在する北区。そして繁華街である中央区。

この男たちはその中央区の東側を最近賑わせている盗人集団だ。

盗むといってもバイクや車を使ったひったくりがほとんどで、怪我人はほぼいない。しかし警察をかなり警戒しており、周りにあまり人がいない状況でしか犯行を行わないため、警察も困り果てている。

そして先刻あたしの知り合いの後輩がこいつらの被害にあった。あたしたちは彼女のバッグを取り返すためにここにいる。

しかし目の前の男は呆れたような顔をあたしに向けた。

「はあ？ それだけで俺達疑うわけ？ 傷つくな〜」

オーバーリアクション気味に傷ついたフリをする男。見るに堪えないので二つ目の指を立てる。

「二つ目。バイクのナンバーくらいは隠しとけ」

男たちの内、後方にいた奴の一人がビクリと反応する。

バッグを盗られた彼女はバイクのナンバーを憶えていた。そしてそのナンバーのバイクがこの建物の前にあっただのだ。

……まあそれだけじゃここにあるってことは分からないんだが、そこは裏技を使わせてもらった。あたしにしかできない裏技を。

ガタイのいい男が物凄い形相で反応した男を睨む。睨まれた男は蛇に睨まれた如く固まった。しかしすぐに向き直ると今度はこつちを睨む。

「……実はあのバイク、さっき拾ったんだよ。そうだよな？」

さっき睨んだ男に確認をとるように首を回す。睨まれた男はブンと首を縦に振る。ガタイの良い男はそれに満足したように頷く。

「まあそういうことだ。悪いが……」

「ウダウダ言わずにさっさと出せって言ってるんだよ。このハゲ」
言った瞬間、場が凍りついた。

気まずさに後ろの二人に顔を向けると、二人ともいつもの表情の中に困ったようなものを覗かせている。

振り向くとガタイがよくて生え際の交代した男の顔が引きつっている。こめかみにも青筋が浮いてまあ。

……でもまあ謝る必要もないだろう。ていうか今までよく我慢した自分。そんなことを思い、苦笑しながら三本目の指を立てる。

「三つめ。人相悪過ぎだお前ら」

堪忍袋の緒が切れたのか、ハゲ男が手に持った角材を振り上げた。
遅い。

あたしは肩にかけたケースからそれを取り出すと男の腕に叩きつけた。

うめき声をあげてハゲ男が角材を取り落とす。その視線はあたしの獲物 木刀に注がれていた。

「て、手前え……」

「やっぱり話し合いは性に合わねえわ。こっちの方が分かりやすくていい」

あたしが木刀を抜いた途端、男たちの間に動揺が走る。

「お、おい。あれ……」

「まさか……」

「お、お前ら何してる。ヤれ！」

ハゲ男が声をあげる。しかし男たちの中に率先してかかってくるような奴はいないようだ。つまらん。

「どうした！ なにしてる！」

「あ、兄貴。こいつら『宝栄の三鬼』ですよ」

「だからなに………つてえええー！」

「あの『裂』の彫りの入った木刀。間違いないっす」

あたしは男たちの反応に三度目の溜息を吐いた。

『宝栄の三鬼』とはあたしと後ろの二人 四条院刹那と二条牡丹 の三人組に不本意にも付けられた字名だ。

あたしたち三人が今年から通うことになった北区にある宝栄女学院。入学早々そこでちよつとした事件があった。

簡単に言えば不良のカチコミ。そこであたしらは不本意ながら大活躍をしてしまったわけで……。

「おいおいマジかよ。ホンモノじゃん」

「わ、目があった」

「気を付ける。ガンつけられただけで吹き飛ばらしいからな」

んなわけあるか。

と、気付くと目の前のハゲがプルプルと震えている。まあ仲間に裏切られたのだから無理もない。

気の毒に思っただけに手を伸ばすと、男はその手をガシツと握ってきた。マズイと思い引き剥がそうとした瞬間、

「ササ、サイン下さい。ファンなんです！」

ガタイのいいハゲの大男は少年のようにキラキラとした瞳であた

しにそう懇願したのだった。

ガタコンガタコンと電車に揺られながら帰路に就く。

「あー、メンドかった。ったく。何が悲しゅーて不良の集団にサインして回らにやいかんのだ」

結局あの後態度の豹変した、というかもはや只のミーハー軍団と化した男たち全員にサインをする羽目になったのだ。正直サインなんて持ってなかったから本名を普通に書いたのだが、それに狂喜乱舞する不良どもに何やらむず痒いものを覚えた。

「お疲れ様、真ちゃん」

そう言つて柔和に笑うのは私の友達の一人、二条牡丹だ。誰にでも優しく接し、さっきの不良ども相手でも丁寧で柔らかな物腰を崩さなかった。そのおかげかどうかは知らないが、不良どもの何名かは帰るときこいつに熱い視線を送っていた。なんとというか、お姉さんというかお母さんというか、そういう母性を感じさせる奴なのだ。「でもいきなり仕掛けるなんて吃驚したよ。我慢できないんだからもう」

そう言つて牡丹がめつと指をこちらに突きつける。なんとというか、めつちや可愛い。やはり男なんぞにこいつはやれんな。

「しかしあそこで真がやってなければ、私があいつの顔面を破壊していたわ…」

「せつちゃんまでそんなこと言う」

顔面破壊とか物騒極まりないことを言ったのはもう一人の友達、四条院刹那。非常に嗜虐的傾向の強い、分かりやすく言えばDSだ。常にツンケンオーラを出していて、牡丹とは反対に周りを落ち着かない気分にさせる天才だ。しかもそれを分かっているやっっているのだから始末が悪い。

二人ともあたしの幼馴染であり親戚だが、こう温度差が違ってよく仲良くできるなと思う。

「でも牡丹。正直あいつの口臭は明らかにそこらの小鳥を殺すレベル

ルよ。いくなれば人型殺鳥剤。鳥を愛する私がそんな存在を野放しにできると思う?」

「え、えと。それとこれは話が違ふような……。ていうかせつちやんが鳥愛好家っていうの初めて聞いたよ」

「そうね。嘘だけど」

「ええ〜?」

ほんわかとツンツン。牡丹と刹那でプラスマイナスゼロってところか。ちょうどいいバランスだからだろうか。

え? じゃああたしはどちらかって?

あたしはどちらでもない。只の天秤。それがあたし。

さほど人のいない西区の改札口から出て、あたしは大きな欠伸をした。その様子を見て牡丹がまためつと指を突きつける。

「もう。はしたないよ」

「全くです。次期当主としての自覚が足りませんね。真お嬢様」

聞き覚えのある声に眉をしかめる。声のしたほうを見ると、そこには予想通り巨大なベンツと、いやな奴がいつも通り姿勢よく立っていた。

「……山下。なんでここにいる」

「それは観念的な意味合いでしょうか」

「ふざけるな。もう一度言う。何故此処にいる」

思わず舌打ちをする。この男はこのように人を苛立たせるのが上手い。特にあたしをだ。

二条家専属のくせに腹が立つ。

その腹が立つ男はいつもの様に腹が立つ仕草で礼をすると、蛇のような眼で私を見る。

わたしを、視るな。

「実はお嬢様に客人が来られています」

「……あたしに、客？」

「は。日下部源十郎様に御座います」

恭しく礼をする山下に苛立ちながら、あたしは客の名を頭の中で反芻する。

確か二条家の血筋の、つまり牡丹の親戚のおじさんだったはずだ。まあおじさんというよりはおじいさんといった方がいいような年齢だったはずだが。何度か会ったことがあるし、そのとき刑事だとか聞いたことがあるような気がする。

しかしそれだけだ。本条家に連なる十の連条には横の繋がりが薄い。会ったその数回も年始参りとかその辺だったはずだ。

あたしよりよく知っているであろう牡丹の方を見るが、彼女もふるふると首を振る。

「その源十郎おじさんが何の用だよ」

「さあ？ 伺っておりますので」

こういうところがこの男の嫌なところなのだ。こちらが苛立つのを承知で苛立たせるようなことをする。

蛇男め。

あたしはこれ以上の問答は暖簾に腕押しということが分かっているため、黙って車に乗り込むと棒のように立つ二人に声をかける。

「牡丹と刹那も乗れよ。途中まで一緒に行こうぜ」

「う、うん……」

「分かったわ……」

いきなりのあたしの変わりように驚いたのか、緊張したように車に入る二人。怖がらせてしまったか。あたしは努めて明るく二人に笑いかける。

「大丈夫、大丈夫。山下は口の減らない野郎だけど、運転中だけは静かだから」

いつものあたしの調子に戻れただろうか。自信はない。しかし彼女らの顔から少し緊張がとれたということは効果はあったということだろうか。

この国最古にして最大の名家、本条家。その分家として存在する連条の内の一家が三条で、その本家は古くから存在する日本家屋だ。その中では女中やらなんやらがいつも忙しく仕事している。

「あ。真お嬢様」

「お帰りなさいませ、お嬢様」

「お帰りなさい。お嬢様」

皆わたしに気付くとすぐさま笑顔で礼をする。しかしその目にあるのは怯え、蔑み。好意的なものは只の一つもない。

この屋敷にあたしの居場所はどこにもない。

あたしは自分の部屋で制服から屋敷内での服、着物に着替えると客間に赴いた。そこには確かに微かに記憶にある人物が座っていた。横には茶を出したと思われる女中。

彼は女中にありがとうと言って下がらせると、あたしに座るよう促す。あたしはそれに応じず立ったまま端的に尋ねる。例え年上だろうと警察だろうと、この屋敷内ではあたしの方が立場が上だ。へりくだる必要はない。

「何の用だ」

「……物怖じしないお嬢さんだ。聞いたとおりだよ」

そう言うと彼はスーツの中から数枚の写真を取り出し、こちらに差し出す。あたしは渋々それを受け取り、目を通す。

「……誰これ」

そこには見たこともない、おそらくあたしと同じ年頃であろう女子が、写真の枚数と同じ数だけ映し出されていた。

目の前の男、日下部源十郎はあたしが写真に興味を持ったのに我が意を得たりとニヤリと笑い、あたしにとって衝撃の一言を発した。「君には彼女らを殺した犯人を見つけてもらいたい」

今思えば。

これこそ悪魔の誘惑だったのか。
そんなこと、今になっても分かりはしない。

く宝栄の三鬼 完く

#3 不穩の日常

#2 不穩の日常

朝です。

小鳥さんがピチュピチュと元気に歌っている。昨日の雨のせいかちよつと雲は残っているけれど、気持ちのいい朝。絶好の登校日和よくわかんないけど。こーいう日はなにかいいことがあるような気がする。ていうかきつとある。絶対ある。なんか……なんかわかんないけどきつとある。

「おはよー」

「あ、おはよー」

自転車に乗った友達が挨拶してきたので私もニッコリと返す。うん、ベストスマイル。

「虚淵さんもおはよー」

その子は笑顔で私の隣にいる彼女にも挨拶した。

「ええ。おはよう」

彼女も微笑んで挨拶をする。

まるで女神様のような微笑み。後光が射したような彼女の笑顔に思わずうつとりしてしまふ。挨拶した子もそうだったのか、顔を赤くしてそそくさと行ってしまった。

私の隣を歩いている彼女。彼女の名前は虚淵沙耶。私の小さい頃からの一番のお友達。綺麗で格好いい私の大切な人。

「ねえ、さーちゃん」

「なに、ゆーちゃん？」

沙耶 さーちゃんはいつだって私の話を聞いてくれる。ちゃんと顔を見て話してくれる。時々話が難しくてわかんないこともあるけど、私にとってはその時間がなにより楽しい時間。

ともあれ彼女にゆーちゃんと呼ばれている私は秋山由紀。ごくごく普通の女子高生であります。

「そろそろ学校には慣れた？」

「そう言うゆーちゃんは？」

「私はダイジヨープだよ」

「私はまだ慣れないかな。ゆーちゃんがうらやましい」

そういうなんでもない会話の中でも彼女の一拳手一頭足は絵になる。その長い髪はキラキラと輝いてまるで澄んだ川のようにだし、均整のとれたプロポーションはモデルさんに引けを取らない。そしてなによりその青みがかかった瞳がまるで宝石のようで、思わず引き込まれてしまいそう。

対する私といえば胸は大きいって言われるけどそんなにスタイルいい方じゃないし、顔も普通だし、頭良くないし。

私なんかがさーちゃんの友達でいいのかな。そう何度も思っ、昔思い切ってさーちゃんに聞いてみた。そしたらさーちゃんはすごく優しい顔をして、

「ゆーちゃんが隣に居てくれるから、私は私でいられるの」

そう言ってくれた。すごく嬉しかった。

だからさーちゃんと私は今までも、そしてこれからもずっとずーっとお友達。

決定事項です！

楽しい時間とは早く過ぎるもの、と誰かが言ってたような気がする。そのくらい早く学校に着いた。

宝栄女学院高等部。今年の4月から私達の学校になった場所。制服が可愛いので人気があるらしい。私も結構お気に入り。

「おはよー」

「おはようございます」

道行く人が次々挨拶してくる。多分これは私じゃなくてさーちゃんにしているんだろうなあ、なんて思いながら私も挨拶する。優越感なのか罪悪感なのかよくわからないこそばゆい感じ。

下駄箱に着く。皆忙しそうに靴を履き替えている中、

「あれ？」

妙なことをしている子がいた。

靴を履き替えないまま下駄箱の周りをウロウロしたり、スノコ（でいいんだよね）の下を覗き込んだりしている。明らかに挙動不審気になったので話しかけてみた。

「あー」

その子がビクツとなつてこっちを見る。明らかに困った感じの顔。これは見過ごせない。

「どうかしました？」

そう私が聞くとその子は天の助けのようにこちらを仰ぎ見て、

「あ、あの、ハンカチ、落として、その、大事な、だから」

「うん。わかった」

ホントはよくわかんなかったけどこの子が困っているのだけはわかった。だから手伝おう。

その子はポカンとしていた。なにか変なこと言ったかな。もしかしたら聞こえなかったのかもしれない。なのでもう一回言おうとしたらさーちゃんにポンポンと肩を叩かれた。今度はさーちゃんが困ったような顔をしている。

「ゆーちゃん。……なにやってるの？」

「ん？ だってこの子困ってるから」

「いや、このままだと私達も遅刻……」

遅刻なんて関係ありません！

「人が困つてたら助けるのはフツーでしょ！」

私の剣幕にさーちゃんもびっくりした顔をする。レア顔だ。珍しいものを見た。

だけどさーちゃんもなかなか引かない。私の肩に手を置いたままだ。だから私はハツキリと言った。

「そんなに遅刻が心配なら一人で行っていいです。ここは私一人です。やりますから！」

思わずふてくされた感じになってしまった。ちょっと反省。さー

ちゃん怒ってないかなと思ひ、恐る恐るさーちゃんの顔を窺う。すると、さーちゃんは呆れたように笑っていた。

「もう。ゆーちゃんには敵わないわね」

そう言つと、さーちゃんは私ではなく困つてる子をまじまじと見た。上から下までじっくりと数十秒。

その視線に彼女が真つ赤になりだした頃、さーちゃんは不意に視線を外した。そして校門へと歩いていく。

「ちょ、さーちゃん。どうしたの？」

「……………」

私の言葉を見無視してさーちゃんはスタスタと歩いていく。しょうがないのでその子の手を引いてさーちゃんを追った。

さーちゃんが向かったのは校門脇の大きな木の下だった。そこに屈んでなにやらゴソゴソとやっている。ハッキリ言つて怪しい。周りも怪訝な目で見てるし。

「あの一……………さーちゃん？」

「……………あつた」

そう言つてさーちゃんがヒラヒラと掲げたのは四方にレースの入つたハンカチ。少し汚れてはいるけどなんだか高そうだ。

「あ、それ！」

付いて来ていた子が思わず反応する。と言つことはこれが…………。

「これが、探してたもの？」

「はい、そうです！　よかつたあ！」

そう言つてその子は泣き笑いのような表情を浮かべる。さーちゃんがハンカチを軽くはたいてその子に手渡した。

「もう落としちゃ駄目よ」

「はい…はい！　ありがとうございます！」

ホントに嬉しそうで私も思わず笑顔がこぼれる。

「本当にありがとうございます。虚淵さん。秋山さん」

その言葉に私は首を傾げる。

「？　初対面……………だよな？」

さーちゃんの方に顔を向ける。さーちゃんも不思議そうな顔をしていた。するとその子は可笑しそうに笑って、

「お二人のことならこの学院の大抵の人が知ってますよ。とっても美人で素敵なコンビだって」

その言葉に私とさーちゃんは顔を見合わせる。いつの間にか有名な人になってたんだ、私達。

そこでキンコンという音が鳴った。始業5分前の予鈴だ。

「もう行かないと遅刻しちゃいますね。このお礼はまた今度、必ずしますから。それじゃ」

そう言う彼女が礼をして走って行ってしまった。ポツンと佇む私達。

「さて。私達ももう行きましょうか」

そう言うさーちゃんが私に笑いかける。だから私もいっぱい笑顔で、

「うん！」

そう言うって小走りに下駄箱へと急いだ。

その後なんとかギリギリで間にあったけど、クラスの皆に珍しがられたとき。ちゃんちゃん

さーちゃんには昔から不思議なところがあった。

同年代の子や時には大人も知らないことを知っていたり、何もないところをじつと見つめていたり、他の子とは違うところがあった。

こんなことがあった。

小学校の頃、学校の授業の一環で手品を見た。

確か公民館か何かの催しだったと思う。手品は概ね好評で、私を含めたほとんどの子がその手品師の魔法に見入っていた。

しかし、舞台の半ばでそれは起こった。

マジシャンの人が一人の子を指名して舞台上がってほしいと言った。観客を手品のパーツにして観客にタネの無さをアピールする、いわゆるスタンダップ・マジックというものだ。

そこで選ばれたのが彼女、虚淵沙耶だった。

彼女は素直に従って壇上上がった。そしてマジシャンがテーブルに広げたカードの中から一枚選び、彼に言われるままそこに名前を書いた。

マジシャンはそのカードを山札の上に戻し、カードを指さして、

「確かにここにあなたのサイン入りのカードがありますね」

と言った。そこに疑問を差し込む人はこの場のどこにも誰もいなかった、はずだった。しかし彼女は首を振り、

「違う。ここ」

と言ってマジシャンの袖の中から自分のサインの入ったカードを抜き取った。

結局そのマジシャンは、それ以上マジックを続けることなく壇上から去って行った。

あの時彼女が何をしたのかわからない。ひよっとしたらマジシャンが袖にカードを隠すのが見えてたのかもしれないが、他の人は誰もそれに気付かなかった。

彼女は間違いなく他の人とは違うものを見ていた。

そんな彼女を気味悪がる子も多かったけど、私はずっと彼女の傍にいた。だってわかってたから。彼女は悪い子じゃないって。

例え少し他の子とは違うところがあっても、私の友達には違いな
いって。

そんな私とさーちゃんの平穏な朝は、急な来訪者によって儚く崩れ去った。

その人はお昼休みに不意に現れた。

その時間、私とさーちゃんは他愛無いおしゃべりをしてた。さーちゃんの席は私の前の席で、おしゃべりをするときはこっちに半身を向ける形になる。窓際のこの席は光がよく入ってさーちゃんの髪をキラキラと輝かせる。こんな素敵な友達がいて私は世界一幸せだなぁ、なんて考えていると不意にさーちゃんの前に人が立った。

私が誰だろうとその人の顔を見ようと思った瞬間、手の平が私の机にバンツと叩きつけられた。

教室中がシンツとなる。教室中のだれもかれもが動きを止めていた。

「あんたが虚淵沙耶か？」

私はその問いを発した人　さーちゃんの前にいる人　を見た。綺麗な人だ。さーちゃんとタイプは違うけど凛とした感じのする人。やや吊り目がちだけどそれがセミロングの髪とよく合っている。そしてその黒瑪瑙のような瞳はまっすぐさーちゃんを見続けている。私は見たことのない人だ。だから聞いてみた。

「ええと…どなたですか？」

その人がチラリとこちらを見た。けどすぐにさーちゃんに視線を戻す。ちよつとムツとした。

「礼儀知らずな人ね。無視することないんじゃないかしら」

さーちゃんが自分の机に頬杖をつき足を組みながら言う。さーちゃんはホントにこういうポーズが絵になる。

その人は少しの間さーちゃんを睨んでいたけど、やがてちよつとバツの悪そうな顔になってこちらを向いた。

「1　Cの三条真だ」

彼女がそう言った瞬間、教室内が急にざわついた。

「三条って……」

「確か三鬼の……」

「ええ？　あの百人殺しの……？」

そんなことを言いつつ一人、また一人と教室から人が出ていく。そして遂には私たち三人だけになってしまった。でも彼女は気にした様子もなくさーちゃんをじっと見つめている。そしてさーちゃんもそんな彼女を正面から見返している。

「あ、あのう……」

「……」

「き、気まずい……」。

あまりの緊張感に私が声をかけても反応なし。正直皆が出て行った理由もわからないし、せめて私たちだけでも楽しくおしゃべりしたいんだけど。

私がそう考えていると不意にさーちゃんがふつと笑い、手を前で組む。偉い人がよくやる感じのあれだ。でもさーちゃんがやると不思議と嫌味っぽくならない。カツコいい。

「初めまして、三条さん。あの悪名高き『宝永の三鬼』にこんな形でお会いすることになるとは思いませんでした」

「そっちこそあたしのガン喰らって微動だにしないと只者じゃなさそうだな」

そう言って三条さんもニヤリと笑う。

……なんだろう。おしゃべりしてるのにさっきよりも緊張感が増しているような。

「で、虚淵沙耶に間違いないな」

「ええ。それで？」

「ちよいと面かしてくれねーか」

教室の外からざわつという声が聞こえた、ような気がする。

「ええ。いいわよ」

教室を出て、屋上へ通じる階段を上る。

「ねえねえさーちゃん。屋上って立ち入り禁止じゃなかったっけ」

「そうだけど……。それはそうとゆーちゃん。呼ばれているのは私だけなんだからついて来なくてもいいんだけど」

「でも……」

なんか三条さんって恐そうだし、一人でなんて行かせられないよ……とは本人が目の前にいるのに言うわけにはいかないし……。

とか思っている間に屋上に通じるドアに着いた。三条さんがノブをひねりドアを開け放つ。

私はまるで違う世界に足を踏み入れたかのような気分になって身を竦めたが、さーちゃんは何のためらいもなくドアの向こう側へ足を

を踏み入れる。私は慌ててその後を追った。

屋上にはすでに人がいた。背の高い優しそうな人と、背の低い恐ろしい人だ。その横に三条さんが並ぶ。てんでバラバラなのに妙にバランスのとれた三人だ。多分仲いいんだろうな、と漠然と思う。

『宝永の三鬼』が勢ぞろいとは…。何？ いきなりヤキでも入れられてしまうのかしら」

言葉とは裏腹に余裕綽々なさーちゃん。ていうか……。

「ねえねえさーちゃん」

「なに、ゆーちゃん？」

「さつきから思ってたんだけど……」

「うん？」

「『ほーえいのさんき』って何？」

さーちゃんと目の前の三人が揃ってズッコケる。

「…え？ なになに？ 私変なこと言ったかなあ」

「……ゆーちゃん。いい？ 『宝永の三鬼』っていうのはね……」

その後数分をかけて私に『宝永の三鬼』が何たるかを教えてくれるさーちゃん。そして説明が終わるころには私の顔からは血の気がすっかりなくなっていたわけで。

「ええええええ！？ じゃあこの人たち大量殺人犯？」

「ちっげえよ！」

三条さんが力の限り叫ぶ。

「今の説明には語弊がある！ 別に人死んでねーし！ ……二十人くらいは半殺しにしたけど」

「そうそう。超能力者じゃあるまいし、人を触ってないのにポンポン投げるなんてできないって。触ってなさそうで実は触ってるんだよ」

「そうよ。それに私はやるなら徹底的にやる女よ。一族郎党ともどもね」

「「やるな！」」

そう言っただけでギャーギャーと内輪で口論を始める三人。なんかそん

な三人を見てると、

「ふ、ふふ……」

あまりにも普通で、

「ふふ、うふふふふ」

あまりにも自分たちと近くて、怯えるのが馬鹿らしくなってしまう。

「あは、あはははははは！」

思わず大声を上げて笑う私をポカーンと見つめるさーちゃんも含めた四人。だけどすぐに私につられたように笑い出す。

屋上は少しの間笑いの合唱で包まれた。

しばらくそのまま笑った後、私たちはお互いに改めて自己紹介し合った。

「三条真だ。真でいい」

「二条牡丹です。私も牡丹でいいよ」

「四条院刹那。私も刹那でいいわ。か、勘違いしないでよね。二人がいいって言うから、そのついでなんだからね！」

「お前ね……」

なんかよくわからないけど怒られた。でも面白そうな人たちだなあ。

「本条十家、か……」

「ん？ なんか言った、さーちゃん？」

「ううん。なんでもないわ」

さーちゃんは首を振るとスカートの端を持ち上げて優雅に礼をする。

「虚淵沙耶よ。で、こっちが……」

「どうも〜。秋山由紀です」

「ゆーちゃん。それ漫才師っぽい」

そ、そうかな。普通だと思っただけど。恥ずかしくてなんとなく頭をかいてしまう私。

「はっはっは。あんたらも相当変な奴らだな」

「あんたらもってことは自分たちもってこと？ 自己分析が的確にできていて何よりだね。……ではそろそろ本題に入りましょうか」
さーちゃんがそう言った瞬間、冷たい風が通り抜けた。

「…そうだな。どう言えばいいか……」

「率直で結構よ」

「なら率直に言わせてもらっせ。『舌切り雀』の事件、知ってるよな？」

そう言われて私は舌切り雀について脳内検索する。舌切り雀ってあれだよな。昔話であるやつ。えーと確か内容は……。

「ゆーちゃん。別に昔話の舌切り雀のことではないわよ」

「え？ そうなの？」

「最近起こった猟奇事件のこと、でしょう」

さーちゃんがそう言って首を傾げると、三条さん もとい真ちゃん

は「ご名答、とこちらを指さす。その指を見ながらさーちゃんはスラスラと語りだす。

「最近起きた女子高生連続猟奇殺害事件。殺害方法は刺殺、絞殺、撲殺と様々。しかし死因とは関係なく死体からはあるものが切り取られていた」

「まさかそれが……」

「そう。舌よ」

!!!

「故に俗称『舌切り雀』。犯人のことを指すこともあるわね。今までの犠牲者は三人。いずれも異なる学校に通う女子で全員が舌を切り取られている。それ以外に共通する特徴はなく、殺害現場および殺害時刻も異なっている……ってどこかしら」

そこで私は思い出す。確かに聞いたことがある。ニュースでも見たし、食堂で噂している子もいたような気がする。でもここからは全然遠いところの話だったと思ってたけど……。

「随分詳しいんだな」

「あいにく耳と記憶力はいい方だね。自然と頭に入ってきてちゃうの

よ

「……本当にそれだけか？」

瞬間、空気が凍る音がした。

牡丹ちゃんが微笑みながら言う。

「実は知り合いに警察関係者がいるの」

「本条だもの。いても不思議じゃないわね」

なに？ この空気。

刹那ちゃんが目を細めながら言う。

「その人が言うには、事件の起こった日には必ずその近くで宝永ういの制服を着たやつが出没してるんだという話よ」

「へえ」

さっきまで仲良くおしゃべりしてたのに。

真ちゃんが真顔でこちらに近づく。

「しかもその特徴があんたに似てるんだ」

「奇遇ね」

手を伸ばせば届くという距離で真ちゃんは立ち止まる。そしてさ

ーちゃんをじっと見たままこう言った。

「犯人、あんたか？」

私は心臓がつぶされる音を、聞いた。

く不穏の日常 完く

#3 魔の宿る瞳

#3 魔の宿る瞳

「うだ、ローガン」

誰かの声が聞こえる。どこかで聞いたことのある声。しかし何故か遠くで話しているように霞がかっている。

「おい。どうだと聞いてるんだ、ローガン」

「ふむ。まあそう急くものでもないよ。僕に解決できない問題など、そう、男女間のいざこざくらいなものさ」

「そんなことを聞いてるのではない!!」

……ああ。分かった。これは記憶だ。ひどく遠くの。まだあたしがわたしと名乗っていた頃の記憶。

わたしの目の前には二人の男がわたしの方を見ながら議論している。一人はわたしの父親。そしてもう一方は父が連れてきた医者の名乗る男。

男は眼鏡の下の目を愉快そうに歪め、肩をすくめる。

「君も余裕のない男だなあ。甘い菓子を食うといい。日本には確か和菓子とかいう」

「下らん問答はいい。結論だけを言え」

男は溜息を吐き、やれやれと首を横に振ると、わたしの顔をまじまじと見つめた。否、わたしの眼を。

わたしは生理的な恐怖を感じながらもその視線を外せずにいた。なぜなら、父がそうするようわたしに命じたから。

父の言うことは絶対。それがこの家の、わたしの中の絶対の掟。

わたしの眼をしばらく愉快そうに眺めた男は、ふと視線を外すと、部屋にあった絵画を指差した。

「あれはなんだい?」

わたしはしばらくその問いが自分にかけられたものであることに

気付かなかった。しかし父の目が険しくなっていることに気づき、慌てて答える。

「え、えっと、絵です。父様の」

「ふむう」

そうして男は黙り込むと今度は父を指差した。

「これはなんだい？」

「……父様、です」

「うん。正解」

わたしにはこの問いの意味が分からなかった。少なくとも当時のわたしには、それが異常なこととは思わなかった。

「おい。今のは……」

「うん。今ので確信に近いものを得たよ。なるほどなるほど」

何かなるほどなのかよくわからない。わたしはもう一度部屋の中を見回した。この一度も来たことのないどことも知れない部屋を。

「では、やはり……」

「うん。彼女は忌み子だ。君らが待ち望んでいた、ねえ」

あたしはゆっくりと目を開ける。そしてゆるゆるとその体を起こした。

枕元の時計を見る。午前6時前。いつも通りの起床時間だ。あたしは溜息を吐くと布団から這うように出る。

途端、頭に鈍痛が走る。

……昔の夢を見るといつもこうだ。

あたしはもう一度大きく溜息を吐くと、顔を洗うべく部屋の障子を開けた。空はあたしの心を表すように、曇天で覆われていた。

あたしは顔を洗いながら頭痛の理由を探る。

そう。元はといえばあの源十郎という男が持ってきた写真、というより要件がそもそもの始まりだったはずだ。

あたしは昨日起こったことを頭の中で反芻した。

「君には彼女らを殺した犯人を見つけてもらいたい」

「……何言ってるんだ？ おっさん」

あたしはごく当然のことを言ったはずだが、目の前の男はふざけた様子など一つもなく言葉を続ける。

「『舌切り雀』の事件。知っているかな？」

「……まあ、一応」

とは言ってもニュースや新聞で見聞きする程度の情報だ。警察関係者なら当然それ以上の情報も持っているだろうし、わざわざ一介の学生に聞くことじゃない。

あたしがそう言おうとした時、あたしの全身の感覚がグルリと回転した。

色は反転する。上下は消失する。左右は存在しない。

何もかもを写し、しかし何もかもを映さない世界。

視覚情報だけでなく平衡感覚すらもなくなり、あたしはその場に

その場と思しき場所に膝を着く。

大丈夫か、という声が微かに聞こえる。あたしはそちらを向こうとして、しかしそこから眼を逸らした。

今見れば、視てしまうから。

しかし逸らした視線のその先に、視てしまった。あの写真を。

あたしの眼の中に様々な事象が飛び回る。彼女たちが誰か。どのような人物か。どのような環境で生きてきたか。そして、どのように死んだか。

その多くは意味のないものとして流れる水の様にあたしの中を流っては忘却させられていく。しかしその中に、残っているものがないくつかあった。

「嘘……つき……？」

それはあたしの口から発せられているとは思えないほど枯れ果て

た声だった。

「おい。大丈夫か」

源十郎があたしの肩をゆする。そこでようやくあたしははっと我に返る。それを見て、源十郎は静かにそれを口にする。

「…視えたのか？」

「……………ああ」

あたしがゆつくりと頷くと、彼も安堵したように手を肩から離す。

「やはり、か」

「……………？ 何がだ？」

あたしはまだくらくらとする頭を押さえながら源十郎の顔を見る。そこには何かを悟ったような目があった。

「私がここに来た理由はね、真君。本条宗家からそうするよういわれたからだ」

「宗家から…？」

「ああ。君ならこの事件を解決できると聞いてね。…………その眼を使つて」

あたしはギリツと歯を食いしばる。本条宗家はいつもそつだ。高みに立つて、まるで何もかも見通したように。

腹が立つ。

「…………それは、つまりこの件は宗家からの命令ってことか」

「…そういうことになる」

そして何よりも、

「……………分かった」

それに抗えない自分に腹が立つ。

顔を上げる。目の前には鏡。自分と同じ顔をした奴がそこに映りこんでいる。

あたしは指先を自分の眼に近づける。

この眼さえなければ、あたしは。

ふと、

(あなたはわたしなんだから)

あたしの意識は、そこで途切れた。

目を覚ますともう昼前になっていた。手や足には包帯が巻かれています。痛みはないが、はたから見ると痛々しい様相になっていた。

あたしは女中に少し早い昼食を作ってもらい、宝永の制服へと着替えた。冬服でよかった。足の包帯は靴下などで隠せても手はそうもいかないから、少しでも目立たない格好で登校したかった。

昼休み中に登校したあたしはすぐに牡丹率いるお節介連中に質問攻めされた。とりあえず手の包帯は料理中の失敗、遅刻は徹夜の読書による寝坊ということにしておいた。牡丹は最後まで疑っていたが、結局根負けしたのか、それとも何か察してくれたのか、それ以上は聞いてこなかった。

そしてその放課後、あたしは二人を屋上に呼び出した。

「……宗家から命があった」

あたしがそう切り出すと、二人がビクリと震えるのが分かった。

十の連条のどれであっても本条宗家は畏怖の対象だ。表だって何かをすることは滅多にないが、真綿で首を絞めるような真似ならいくらでも行う奴らだ。怯えるのも無理はない。あたしの父だつて。

やめよう。どうも今日は思考の海に入り込みがちだ。気持ち切り替える。

あたしは源十郎の言った件についてかいつまんで二人に話した。

「……それ、本当？」

「本当だ」

牡丹の控えめな問いに即答する。事實は事実だ。変えようがない。

「しかし妙な話ね。何故宗家が……」

「さあな。……多分、普通じゃないんだろうさ」

そう。普通ならあたしのところにこんな事件が回されることはない。

三条は連条の『武』の部分の多くを担っている。よってそのような措置を何かしらに対し行わなければならないときは率先して立ち上がらなくてはならない。しかし今回の件は明らかに三条の管轄とは異なっている。

普通ならこれは警察機構につながる二条に連なる者たちが処理すべき件のはずだ。しかしあたしのところにこれは来た。つまりこれは、

「普通じゃないあたしの処理すべき件なんだ」

「…真」

いつの間にか刹那が目の前に来ていた。その顔にはいつもの高くとまったようなものはなく、ただ心配そうにこちらを見ていた。

「……大丈夫？」

なんて目で見てんだよ。らしくないぜ。

ふと胸元にぬくもりを感じた。見ると牡丹がこちらに抱きついていた。

「…ごめんね」

「何を」

「隠さなくていいから。真ちゃんが辛いんだってこと、私たちの前でだけは隠さなくていいから。だから……」

いつの間にか刹那もあたしを抱きしめていた。

「だから、一緒にいましょう。三人で」

目尻に熱いものがこみ上げる。

「……………うん」

ああ。あたしは。。。

神様。いるのならばどうか、この時間が少しでも長く続きますように。

少しして。

落ち着いたあたしたちは今後のことについて話し合った。

「とりあえず宗家からの命令である以上、この件の拒否はできない。

その上でどこからどう手を付けていくかだが……」

「でも手がかりはあるの？」

「そうね。確かそこがこの事件の最大の問題点だったはず」

そう。今までに起きた3つの事件。この全てに物的証拠・目撃証言が一切見つからない。唯一の共通点である『舌を切り取られている』ということがなければ同じ事件としてすら扱わなかっただろう。証拠はない。しかし、

「手がかりは、ある」

あたしのこの眼が言っている。3人に共通するものを。それは殺害された当時に見た光景。

「一つは宝栄学園の制服。二つ目は長い黒髪。三つ目は嘘のように綺麗な貌。そして四つ目は……」

「四つ目は？」

あたしは僅かに言いよんどんでから呟いた。

「……………紅い眼」

牡丹と刹那が驚いた顔をする。それはそうだ。あたしも驚く。まさかこんな近くに自分の同族がいるなんてな。

「真、それは」

「ああ。そういうことだ。だからあたしのとこに回ってきたんだろ
うね」

「でも宗家は何故それを知ってるんだろう」

「さあな」

ああ。知ったこつちゃない。あいつらのことなんか。それよりも、
「牡丹。刹那。明日手分けして今の特徴に該当する奴を探すぞ。ま
あ目立ちそうな奴だから苦労はしなさそうだけだな」

そう言っであたしはニカツと笑う。すると二人も安心したように
笑ってくれた。

実はあと一つ、二人には言っていない3人に共通して見えたもの
があった。

しかしそれは言えない。言いたくない。

(嘘つき)

あたしの心が、それを拒んでいる。

翌日。

思った通り、対象はすぐに見つかった。

流れるような艶やかな黒髪。絵に描いたような端正な顔立ち。

「虚淵沙耶、か。変な名前」

「はわゝ。綺麗な娘だね」

「まさに魔性の女、といったところかしら」

新聞部が隠し撮りした写真を見て、三者三様の反応を示すあたしたち。とりあえず新聞部の奴には写真代を払ってさっさと追い払う。

「どう？ 真。何かわかる」

「……いや。よくわかんねえけど……」

そもそも視えるのは一時的なものなのだ。そのタイミングも自分ではコントロールできない。しかし直感では、

「……こいつはクロ、だな」

「本当に？」

「ああ。少なくとも事件に関係ないとは言えなさそうだ」

視えなくともよく見れば感じる。こいつがどうという奴か。こいつは、

「なかなかの黒さだ」

そう言っただけは笑った。

そして今。虚淵に事の次第を問い詰めた昼休み。あたしの胸には大きな後悔がある。仕掛けるべきじゃなかった。

「そんなわけないよ！」

先に反応したのは虚淵の横にいた秋山とかいう子の方だった。今にも泣きそう、というか涙を目尻に浮かべながら、

「さーちゃんが人殺しなんて絶対ない！ ありえない！」

と泣き叫ぶように言い放つ。さすがに気の毒になって何か言おう

としたが、何も言えるはずもなく。牡丹や刹那も気まずそうに黙り込んだまま。

しかし虚淵だけは違った。あいつはそつと秋山を抱き寄せ、微笑んだ。

「馬鹿ねえ、ゆうちゃん。私が人殺しなんてするわけないでしょう」とすると秋山は、

「うん。やっぱりね〜」

と、何事もなかったかの様に笑った。

ゾクリとした。

その何の変哲もない秋山の顔が、疑うことを全く知らないような無垢な顔が、あたしを恐怖させた。

「驚いた。真ちゃん、変なこと言うんだもん。勘違いかな？」

「ええ。そうよ」

そのあまりにも当たり前な光景が微笑ましく、気持ち悪い。

そしてそれを感じているのはあたしだけではないらしい。牡丹はよくわかってないような顔をしていたが、刹那は顔を青ざめながらこちらを見ていた。

ああ。分かっている。これはあたしのミスだ。友達の前なら取り乱すかも、と思っただのがまずかった。これでは様々な意味で逆効果だ。「あら、三条さん。顔色が悪くてよ」

虚淵が嘲笑する。まるで、蛇のような眼で。

わたしを、視るな。。

瞬間、視界が反転する感覚に陥る。あたしはどこにいて、いつにいたのか。なぜ、どうして、何をしているのか。全てが分からなくなる。

しかし、ひとつだけはつきりしていることがある。

あたしは、

本当に？

（自分が誰なのかなんてどう知るの？）

（他人と自我）

（他人なんてここにはいない）

（じゃあ自我は？）

（あるの？ 貴方に）

（あるわけない）

（なにもない）

（はじめから、あなたなど存在しない）

存在しない身体がきしむ。脳が熱い。口が渴く。胸が縮む。腕が折れる。足が曲がる。眼が痛い。

痛い。痛い。痛い。

悲鳴を挙げるが、それを発する口がない。ならばこれは心の悲鳴か？

悲鳴は外に出るからこそ発散されるもの。ならば吐き出されることのない心の悲鳴は、己に反射し、増幅される。そうして悲鳴にあたしは覆われ、そして

（しっかりしなさい！）

誰かの声が聞こえた。

聞いたことのある、厳しくも優しい声。

（こんなところで一次接触とはね。私も抜けてること）

何を言っているのかよくわからない。だがその声の方からは悲鳴は聞こえない。

（あなたは迷子なの。だからいらっしやい。道案内してあげる）
でも、知らない人についていっちゃんいけないって父様が。

（そんな奴のことはいいの。きつと、私のところについて言うに決ま

ってるんだから)
でも。

(ああ。面倒くさい。いいから来なさい)
ぐいと何かに引つ張られる。何が、どこに、何をひっかけている
がよくわからないが、おそらく前の方に引つ張られていく。

そしてその引つ張られる先に光が見えた。光はどんどん大きくな
り、あたしを包み込んでいく。

あたしはその温かさの中で、眼を閉じた。

「 やん。真ちゃん！」

誰かの声が聞こえる。これは、牡丹の声か。

そつと目を開ける。目の前には心配そうにこちらを伺う牡丹と刹
那、そして秋山の姿。

「 あたしは…？」

「 心配したよ。急に倒れるんだもん」

秋山が心底心配そうに言う。目尻に涙まで浮かべ、こいつは何や
つてんだかな、と苦笑を浮かべる。

「 起きたかしら？」

嫌味混じりの声で虚淵がこちらに近づく。あつちは立っでいて、
こちらは座り込んでいる。当然見下される位置取りなんだが、あた
しはそれが気に入らず、無理矢理に立ち上がる。

「 あら。病人は休んでいたら？」

「 誰が病人だ！」

「 ふむ。急に立ちくらみを起こして卒倒するのは病気とは呼べない、
か。何ならあてはまるかしらね…」

「 おかしな考察してんじゃねーよ！」

あたしが睨んでも虚淵はどこ吹く風。むしろ愉快そうに目を細め
る。あたしが本気できれそうになっていると、牡丹と秋山がまあま
あと間に入ってきた。

「 とりあえず今日のところは手打ちとしたいんだけど、いかがかし

ら？」

「何を以て手打ちかわからないんだけど……。まあもうすぐ昼休みも終わるし、いいんじゃない」

刹那が早々に話をつけ、全員が各々の教室に帰ろうと階段を下りる。そんなとき、最後尾にいたあたしは、前にいた虚淵に何気なく声をかけた。

「なあ……」

「……なに？」

さっきの件、本当のところどうなんだ、と聞きたかった。しかし何故か口から出た言葉は、

「……ありがとな」

虚淵は一瞬あたしが何を言ったのかわからないようだった。しかしすぐにその顔をうつむかせると、肩を震わせ笑い始める。

「な、なんだよ」

「いきなり何？ 謝罪ならわかるけど、感謝されるとは思わなかったわ」

そんなのこっちもわかりやしない。顔が熱くなるのを感じ、早足で虚淵の横を通り過ぎる。

「……虚口忌憚」

足が止まる。ぱつと後ろを振り向くが、いない。いつの間にか虚淵は前へ回り込んでいて、こちらにクスリと微笑む。

「調べてみなさい。面白いから」

そう言っですつと階段の向こうに消える。あたしはただ、呆然とそこに突っ立っていた。

声とは、目に見えないものの中で、最も大切なもののひとつである。

〈魔の宿る瞳 完〉

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4940q/>

虚口忌憚

2011年2月12日15時55分発行